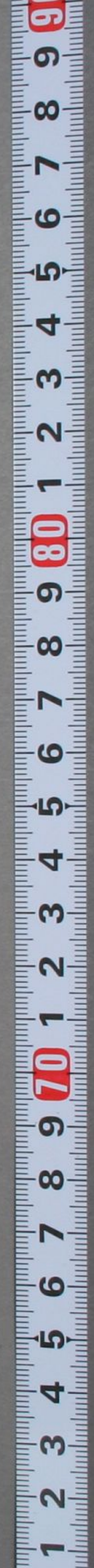


中村俊定文庫
文庫 18
276



延享元



解夏牝序



花の梢 青紫あふりかき紫
白如 夜露と明くし年
光の意こころをさすまじ
奔泉下流 如くし
子孫を父祖師 胤翁に
傳へえよ 戊午乃文月

まぬの七日西より姑あとな
なるして死別のかたきみ
おまをえき家もあことり跡
のゆあといへ小集ふその
あしやうしはあし一程又
三ふあ場の星はかきひて
花のめくくあきの限なきよ

恙悲録は撰ひ思波
ののうまはほそこはは
修しやせいのあやし又
せとを姑あしはふあは
ま者又跡うしま懐旧及
ひあのみはあまくの話を
拾ひて弥補月海よりこは

正号の解反州を
是は一年集取とある女在
のつとある付家毎く
を撰て此等ののふふとそ
ぬ那はのふす撰わあまの
州のしつね姑あまのふふ
泉僧法とく供
——

侍子あはしるか
るつげとふあまい
五分法身の座を
心品吉祥のみわらぶ
ちるを女也縁結あり
るしつねわらぶ
乃る

解夏州今詳此草
茆一名萑菜

福ぬまを流

一夏 明 那 也

草の 菴

巽窗識

歌仙

直ひ火やうごへ伽死を投也流	湖十
ことゝハ法のぬひろけ良	文十
船倉又廿五取乃大うらて	信鳥
折月正し月かしま	全枝
此も守りし時を告るり	木髪
幸又解りし時を告るり	社嵐

評石の町へ木端の山なり
 縁を掛くて花子前志
 枕を置一洞を散すあつさ弓
 子の愛さうしぬ親のわさ口
 桑橋の娘をも喜ぶ小舟の空
 うる指寓くくる乃看病
 大名れ費かそえんりあのみ
 妾あきぬさ地の上もや

封示 亀及 桂十 如貫 石勝 六哥 秋風 泰洲

了うのあつて縁の返を書
 むうい地さるく枕海のま足
 寺よりの古跡亭れもや花の落
 きを眼鏡よそ障の菓を足
 高九の麻乃月をさるはを
 物日平さけて仕息小化物
 五月のよみ袖出せぬ神示也
 せいの光の望遠をきる

和豊 湖十 有佐 惠風 湖雁 坡及 得十 湖刻

留保や血為毒魔女悦丸 雀肆
 田町きき通る 徳の斤段 南平
 ねもーらい水と捨る茅ヶ野 如髪
 大巻てしきやきとも 千色
 葬礼のふのこを法る男仔達 湖堂
 こ井あそり 薙も教 妙 木髪
 月鉾のこかれ出る木賊山 紀逸
 こねも 柔睡の傍にをむく 孤星

^{ナウ}
 本竹の果を付くる 切もろ所 放牛
 村々簾のそく 関乃戸 湖南
 空を念仏曉毎く 活るく 斗百
 垣根て妹ぬのくさる 三崎 巽在
 七曲の様をきく 花の丘 曲菴
 清く流る 好ふ餅 子 魯兆

各點香

萩のちあまれす来まて 七ッ鉢 信鳥
 七宝の光 保たらん 牝のちあ 魯兆
 七堂此 棟木上 くらり なる 灯笼 社胤

李白一斗持百篇と傳へしは
 謝朓をまて 謝朓は 謝朓は 謝朓は
 謝朓をまて 謝朓は 謝朓は 謝朓は
 謝朓をまて 謝朓は 謝朓は 謝朓は
 謝朓をまて 謝朓は 謝朓は 謝朓は

つまも 惜愴の思情おほし
 ちつくり 謝朓はよるこや 七宝の思情
 とくまの 謝朓はよるこや 七宝の思情
 とくまの 謝朓はよるこや 七宝の思情
 とくまの 謝朓はよるこや 七宝の思情
 とくまの 謝朓はよるこや 七宝の思情
 とくまの 謝朓はよるこや 七宝の思情

ちあのもや 雨の回れ 七年 酒 封示
 少車 のちあ 知く 月 全 枝

病瘦 寝たきり 思ふ 思ひ 二月の
 中 には 再び 来て 居る 思ふ 思ひ
 五日 ある 思ふ 思ひ 生年 親戚 思ふ 思ひ
 を 思ふ 思ひ 思ふ 思ひ 思ふ 思ひ

歌採すつきりもよみのかゝり中こゝ
 文月の老翁の七回忌と申す世
 にかつらさそをふり部るしやまて
 大匠をそとすもの十姓百必まうた我
 せん子丙辰の辰胆初る海の馬に 我
 ちるむけは蓋をひてはあまあつとも
 庭しもの一かをさうりあつとも
 路の面障の年をかくててひたりおん
 下二巻を催すとも

尋ふもそのみ月也踊こゝ 湖雁

漸らぬ七回忌の英牌をぬて

流れをむい今もさう 翁草 亀及

金凡の燈籠をえてさお古人の
 もきこふと一アもぬ

魂棚や七人去てあつさぞく 如貫
 夕魚の花れもぬを穿し成ぬ 桂十
 分どの月もぬふれけの光け 六哥
 枝豆やこのりれもも七歩み 泰洲
 開けの水清くきよに記そ仙翁花 和豊
 近火れ支度あまなり七里隆 放牛
 崩子稲穂のありけり七車 南平

うらむを此手向のまづの成
孤星
坡及
芋の地よ包ちやあれそろさ
湖刻

西の流るぬ眼をといつる嵐の
白とをひて

糸と尺を酒を浴せん川施儀鬼 雀肆
みそをよのあめのゆえやせつを 湖堂
むまづりゆも飽一茄子汁 湖南
茶の毛のまき八法のむろが 巽在

鳥息や糸の支なれ物あり 斗百
玉柳の真いさ一及び 得十
踊より年月あり一七あり 如髮
水引のそきみ屑あり玉柳 千色
新おまぬ七捨糸言そ玉またり 惠風
きくおちりそ一やう竹筧 文十

何となくとつあやきおたりとい花千色
手向のあつこをさう冥あよかこま
何れとぬひあまいと力かむ
るのこそおほりなる

歌仙

七の子や育つもたや交認ふ
湖十
扇うちとそともになくあ
木髪
舟の秋兔乃も葉あは志で
平砂
とるのもととれ波を蹴ら
秋風
笠并盤の袂古よかすい
紀逸
ふ心よと能を盤をくひり
石腸

柳井浅石の下もまきあり
 師志ハ悉れあらしむ月
 石まひ切き此は杉木の髪がさ
 古い髪て非おろし砂
 人の名を呼きて猫のうらま
 順孔一夜あらしの役
 和中散時けをえれま五ッ色
 草の鹿ハ餌をほつむす
 契 十 逸 砂 凡 十 契

正字と何れその位を縁切れ
 涅槃坊やこの月と隣り凡
 天台と浄土ハなきむの山
 釜木の習をまよ乙多也
 花およ松の枝む振まき
 髓のあまきり帯を伝受す
 大釜煮るハ鉄象に立度凡
 持場の家来集つきま折る
 砂 十 物 凡 造 物 砂

上

松の戸と松の弓波も月夜
根こきいひも月よ高香
深きい古き人賣れそ時
大和旦を 経くゆく秋
心よりな牽引習ふらん
徳子の蒲團にまゝはれ
雪のい花菊かける竹の香
一家も残る 野の 嵐 集

^{ナリ}
の月やたし梅の親如急
三日よあけす飽録乃時
風ら霞の雲よ流れてこ
景地ハ人よ子をこせり
化すは流れて梅ぬ心あり
海苔を廣げて光りやく

各拈香

なまき魂や昔のまを月があ 平砂
まきの月も七重や行指の社社 秋風
中の内れ戸の明さを泥まつり 木髪
七重や仙も又そののやあ 紀逸

嵐翁の書約の吟をこれたり
しよりしていさう七因の鄙事を
白家のみ

盃や七合入やめと系乳 石腸

歌仙

と火の泣いありると茶點虫 湖十
卯て長し——晨澄の月 笠澤
何おもそも結のそぬれは飲て 湖中
三階翁乃定よをを毛 木髪
たこ也て鹿柳のある 木髪 大朝萍
少く小松を植る 新田 起月

玉標立やすすきよこ 極鳥谷
 著る是所て鶴毛川原毛 汶泉
 叶女意陸の神も引けと引く 艸席
 他念の笛い懐よさす 前路
 志田買ういれを吹そん池袋 左竜
 ちいさき牛の乳も甲し 湖十
 甲乙女の仕組もわつらるる月 秋風
 産砂ふあかすふを借す 致柔

麻布きたり物名の初ら新續を 鳩居
 市門流ちのむねあまひ 旧室
 付子多思ふ人も音町 左英
 暑くくらくと法状の判 湖常
 ふきり盆は似尋なきもの小 盈 泗浪
 程いしりも似博のま地 原富
 肩初まを扱はせまうま 長庚
 病の母おとねらうすあり 全鳥

梯ノ登の途に此の草殿 石勝
 細巴より定む踊場を 買 全鏡
 望橋は目の多い板の庚申 木髪
 分たふたは清水の影 湖石
 かく風呂の葛の上より立ちあり 吐十
 走を人の舟賃とてあり 四乳
 月の隠入給のちよよ入狭山 紀逸
 舟よち舟よりおき草の花 可来

感^{ナリ}の案此付合後て 秋の色 湖十
 むそより一途を以て守 換授 有攸
 空つらぬ人もまゝして 羨深 陽十
 亭うみ火神も獅子のきり花 亭十
 後併いませのあはし 花の春 和推
 七世の縁もむこふ 喉つと 柴翁

谷行香

まほろや踊のりも せめり 湖中

まろ秋や万ものれぬ凡の音 柴翁

秋叶や初の一掃は法のを 湖常

一指は佛よを 鷲及花 泗浪

嵐尾叶やせれを の法は 大湖萍

先生の周を控て悲れ 七年

おひりや思ひ町籠の足もや 起月

梢もぬいあつけり 鳥谷

鶯乃や法場の場も 原富

去るやあふ仙の髪の鳴 文泉

これときにつれて 鳩若

叶のむ心のま 叶席

そはを 前路

響り 左竜

灯籠や 致柔

葉のむ香 有依

いまのまやあみあみしる法の真 左英
 羞し系うららこ解のまよふ 全鳥
 かろけの匂ひよまふ蓮の版 全鏡
 誇郎のおうし海をまふ 長庚
 初秋は法よりけり月をじ 陽十
 菱蕨の七符もせまふ 湖石
 押振なき灯笼は嬌 仏の乳 吐十
 茄子さく半よつろりて法の名 亭十

系萩平凡のまゆや観を音 四乳
 ひとりやあけけのま向もの 可来

きのお跡祭集の哀をけり
 りふれ七用の祥意はあまなりも
 詔際のみみやうなるを歎けり
 伊をきくふり無意尚も
 御一供佛施傳のま
 御中周固を考て旧友法より
 すこののたけ清凡平甚を
 て人し登仙の思ひを
 法道は縁で余芳を吸て古叟の
 玄旨を味てまなく懐思の印るをえん

挨拶やその七腕も 古意をぬむ 笠澤

七周追福并秋情之句

秋の戸はあやうなさぬめ加減 玉泉

老翁師といふ莫逆の友その名をい
なす一り雑談時のうらまは
きささるる七本あり
伊はりしを

さなきふ姑衣ハ淋 秋の凡 我常

ふゆや下のちもれももろあ 曲菴

崩尾草よこなきぬやあの手向ハ 素嵐

つまき茶七まんゆく秋の月 有佐
 越風のころひきむけよきとくふ 百菴
 うつくしきおこぼるのささけ 百洲
 あなやまのささけのひのたまり 米仲
 七仏の縁よも向ん仏の花 笠翁
 起よと那枝校の葉ありけん 青峨
 桑稗の百よま〜 暁雨
 燕佐

海
 瀬戸の魚と云ふ本魚をなうして
 仏とけりや海あり伝てまをを
 ぞまを人まを
 七や七年

其ホ魚〜西風のきむけ比 栢蓮
 りる日の七つよちりぬ 魂 逆 翠扇
 報子〜ても向の文やひろげ月 樓川
 い〜の柄杓も焼 秋のやあ 可圭
以無為心の目能るや天柱落之の
 用是より信を
 中流や片〜めぐる朝の星 羊素

漢新や負のねるよおとこの子 一羅
 熟も菊もまほつて開く菊の門 中和
 佛いさをとりえよ咲ぬめをむ 貞國
 いなつまいごうもまよふ仙うま 祇丞
 さる灯籠ちつうの光は 湖燕
 かんてんの指方さるや波の音 蝸名
 るれもきや嵐はきぬの深くも里 故一
 石よ苔新の破も松樟は 和推

一味雨よ秋の七葉も吹よりの 露月
 駒りはや波の浪衣も吹け流し 万英
 朔りほや下めい硫黄よむせそねる 再賀
 面影のうれおあぬるさ灯籠 秀圃
 七とせや夢売の笑も垂ぬるお 旨原
 七とせのめらるいよま灯籠は 少長
 さる露ハ玉子ももる白芙蓉 和專
 毛の満て西うさく 茄子は 友以

番椒ニと買やあし 男 買明
 白乳の駒れ新をや秋七把 十町
 あえとるれ望るの程も花為 尾谷
 ちああり七燈の由れ蓬花燈 溪染
 あはして待てまきもや七年秋 其
 病くや虫の売ちる牝の志 子鷹
 あまほのやふ尖いちうりり 紀声
 病く遊ふ衣摺くちや萩の花 田社

水臭い物くあおの枯梗は 貴月
 よい物よ望しこられり萩の露 水語
 下あうそる何物あり萩乃を 存義
 冥棚ハ旭のゆぬ おたを利 可笑
 六つ七つ葦花実のよあの子忌は 元亮
 あま月や目暮れ里ハおまを待 双里
 糸うけの面うよこれぬを燈は 落霞
 葉や江戸の外も萩の花 多つめ

時雨んとをよる草の花是 乾竹

あさくふやおきくさる 栗田口 知圭

鳥く鳥く可もやうふのまふこと 晋阿

秋の月照つむの茂と外 雀童

老鼠肝仰七月虫梅の匂せよ
とや一市もつたさ余四つこり

アハハ病もふ満るか今と
何つてもせられとらるましと

あらきあもはつたのしと虫梅も
まきとまあぬをとおひそふ梅梅

鼠尾草や秋もやうく 水信人 更登

鼠尾草のゆくしきり秋もく七月
アハハとまあぬをとおひそふ梅梅
老てまきく鳥くをよる

養蚕のつとむるさうす 垣根氏 莎青

七とせの秋の病もせぬらん 養蚕

七漢いすそかり一町され人の
と善平は十ふをを居れとらる
さひちて今又

七曲の玉も何六 手向 入 乃 舊室

轉瀆の洞乃花やまんちるさけ 芳水

水川や花のうらまをまつらう
 お鳥やセツを爰にえりし
 歌歌や夫の舞此酒をき
 燦けりもあはれとを向は
 聖天のまつり車や七車
 あまの心や思ふも天津星
 及ぶそ敵まゝあり
 鳥くふや女よ志あすはのち
 渭北
 立丸
 沾山
 規十
 何江
 貞屋
 槐翁
 魚貫

墓まゝ七尺去く草殿より
 歌白や聖咲花の下地
 雲の戸を覗て立をたて
 お水をとる子今る落の風
 濡り足のうらまを思ふゆけき葛原
 沸きこゝる牌のうらまを思ふ
 花まゝは伝ふりやのちを控標
 法の色目も思ふ
 花礫
 平洲
 拳遠
 沛雨
 負窓
 負山
 魚川
 買雪
 西此介

那白や藤越のこころ新しき 宗乎
 新膽や煮てを母よ尺さくし 亀音
 花売やあさひ巻く 草の敷 亞白
 那白や家路よをきむ 巻 三夕
 嵐尾州やあまよ磯のたしまり 貞橋
 こころよやうもやめをく 楳樺 信序
 伊月りけもふまはぬあまのふ 城鳥
 那白やあまのたれををん 湖十

歌仙

七尋の隈もこひしうたは 木髪
 ゆれともささふささのま 圃月
 月ハ新夜へさく日あきて 立兒
 花のしりし 鶯の足とぬ 信鳥
 照柳の御車伝えてはむら 文十
 了定かきらなは後のおぬ 笠澤

本城降る猿声可も鐘の石 木富
 師匠如あるのわが河原守 城鳥
 縁をくまを飾る表書き 露集
 三人あそく安流を拭 紀逸
 大鼓を彼乃歌へるの伊豆 朝山
 志ひ守の竿を布袋竹也 芦朧
 敷敷能くあゆませる船 衾朔
 浅もあそいあめ乃月 秋風

猫舌く粥飯をいそぎもく 五井
 い乃字も引そふ字摺の里 湖十
 急めはよふに倒格不景 石勝
 ぬあそふる能のあやめ 南平
 ナ
 吾もあそむる能のあやめ 圃月
 肌の手もく血魄を押し 木髮
 横市も一足低き卯あ垣 信鳥
 馬為人の細川を持 文十

隠去乃ろ通里ある燧箱 笠沢
 神舟をこころし 所年の雪 木富
 ころころひま想若にふははり 城鳥
 空あふけろ 伊勢の言目 高集
 みる残乃布餘の油もなる節 芦朧
 舟をこころし 懐里なるこころ 杆朔
 十之夜破りたまこ子ぬ橋柱 紀逸
 高屋の秋や志めは花緑 朝山

木念乃耳を祝けえ耳くけ 秋風
 高野を吹くよ 少姓者も橋 五井
 高野の吹くよ 少姓者も橋 南平
 新里の吹くよ 毛纏ふ人筆 石腸
 峯つふふもつらゆ花の奥 湖十
 流水の来りし山吹乃以ら 枕草

各焚香

玉柳や角と追子おとす 立兒
七色のちうしほやいぬ 州 木富
鳥らや地根のまじり向ふ 露集
早う灯籠もあねをぬか 朝山
入る月の流の案や花灯籠 芦朧
州の戸や洲まののやむ向 衾朔
ことのもれろのまやあまをま 五井
旅行と振通とあのまをひけ 圃月

後序

冬—月の流るる書
—希まのふん—人
ふふふふふ世かあとなる
名おとせつ橋まね記念とせ

其のくふ木名流の氣流
わく一ゆの月下の七日七めを
其の向と形字ぬじりしる程
其古を懐ひ梅をたて、かふ
まこと予此翁尔後の想ひ

夏三十年とくを回務
門人或は世をたぬ或は
たのみのみあるはき
然る人くむある中か
今醫者風を志のあ由に

以て世に凡三代凡七の業を
物うまひ給へりては
を講れ人きてこそまの程を
府一のは流を廣くおぼれ
自世に守復といふん

憚れんやとさとの志の志可
長く報恩となすその形事

五季成

又十



延享元甲子年七月

彫刻吉田魚川

七九

款

